



白い看護師 黒い看護師

〔愛媛県〕大野 裕子 おのの ゆうこ
59歳

Yさんは糖尿病。軽度の認知症はあったが、インスリンの自己注射は可能。しかし、在宅療養は困難なため、私が勤める施設へ入所となった。

不安があり、「看護師さん、聞いてください」とたびたび呼び止められる。「間食もしてないのに血糖値が上がるとる」「足がピリピリする」「ひもじいていかん」。毎日同じことを繰り返して訴える（ああ、またか——）
顔だけ向けて「昨日も言ったでしょ!!」と体と心はそっぽを向いて業務に追われていた。

ある日、カーテンの奥の備品庫にいと前の廊下からYさんの声がした。他の入所者数人と話されていて、「白い看護師さんはよ

う話聞いてくれるけど、黒い看護師さんはいつも走り回ってどこかに行っちゃってしま〜」と

「はっ?! 看護師? 白い?」

黒い? 私のこと?」。施設なので白衣は着ていない。ポロシャツとジャージだ。確かに私は色黒で、比べて同僚はやや色白かもしれない。外見のことを言っているのだろうか。それとも、白イコール優しい白衣の天使、黒イコール悪魔とか? Yさんには私がどう見えているのだろうか。

カーテンの奥で思考が渦巻き、お腹のあたりがふつふつムズムズしてきた。「ハイ!! 私が黒い看護師です!」といきなり出て行ってやろうか。息をひそめてカーテンを握り締めていた。

翌日も「看護師さん教えて下さい」と私を追ってくるYさんの姿に、いとおしさと申し訳なきが入り混じった感情を覚えた。人として正面から向き合えない自分を恥じ、頼ってくれるYさんの気持ちをくみ取れなかったことを反省した。

「黒い看護師」は、自分への戒めの言葉としていつも心の隅っこに置いている。単に色黒だからそう言ったにすぎないかもしれない。認知症が進行したYさんに確信はできないが、ナースの原点である白衣の天使の精神を忘れずに、日々努めていこうと思っ